038

中央大学商業学校の設立

私立大学附属高等学校の最大のセールスポイントが推薦による所属大学への進学システムである今日の状況からするとなかなか想像しにくいが、私立大学が附属の学校組織を設立した本来的な目的は、予科や専門部の学生をあらかじめ一定数確保しておく点にあった。本学の附属学校組織の嚆矢である中央大学商業学校も同様な目的から設置されたのであろうか。

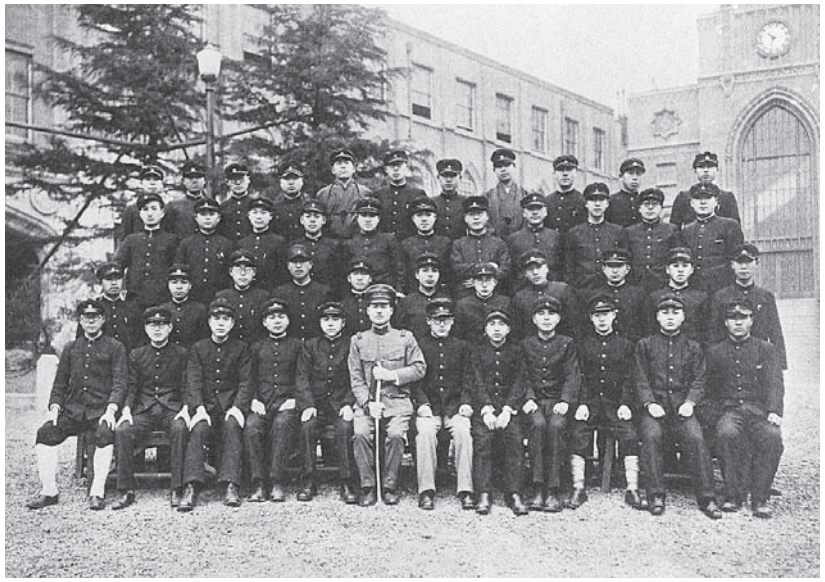
中央大学商業学校は、一九二八（昭和三）年三月に文部省から設立を認可された実業学校である。設立趣意には、当時の日本における中等実業教育の重要性が訴えられるとともに、同校において実業界に適材を輩出するための理想的な商業教育をほどこすことがうたわれている。

しかし実際のところは、千人近くの学生を収容可能な予科教室の夜間利用法を本学の評議会で検討する中から、中央大学商業学校の新設が決議されたようで、もっぱら財団法人中央大学の経営上の問題から附属実業学校の創設が具体化したのであった。

中央大学商業学校は本学初の附属実業学校ではあったが、設立当初、予科・専門部の学生を一定数確保するということは、副次的な目的として位置づけられていたようである。

まず二八年三月末にいくつかの新聞へ生徒募集広告を掲載し、次いで四月一日から初の入学考査を実施した。二八年度は第一学年・第二学年の生徒を募集し、それぞれ一二七人・一〇六人の者が入学している。

入学考査料は二円で、考査方法は基本的に国語・作文・算術の学科試問によったが、高等小学校卒業者か尋常小学校卒業後に二年以上の補修学校を履修した者については、「詮衡（せんこう）」によって入学の許否を決定することになっていた。これらの資格を有する者は、中央大学商業学校にほとんど無試験で入学できたのではないかと推測される。



中央大学商業学校第１回卒業生（1931 年３月）

総勢二三三人の入学者を得て、同年四月十二日には中央大学商業学校始業式が大講堂で挙行され、授業は翌日から開始された。

第一学年は三組、第二学年は二組に編成され、二八人の教職員が授業を担当した。校長の馬場愿治（げんじ）をはじめ、主事の天野徳也、教頭の和田清など、半数近くの教職員が中央大学との兼任であった。

何とか順調に動きだしたかに見える中央大学商業学校であったが、二学年の定員が三〇〇人で、予算収入のほとんどを五〇〇人の入学考査料と定員三〇〇人の入学料・授業料から算出していることからみて、学校経営はそれほど楽ではなかったと想像される。

さらに二九年から三一年は、金融恐慌や昭和恐慌の影響で中央大学の学生数が大幅に減少した時期にあたり、中央大学商業学校の学生数にも深刻な影響を与えたものと思われる。三一年の第一回卒業生は全員で九六人、入学時から実に六割近い一三七人を減じていた。中央大学商業学校は、設立当初から厳しい試練を乗り越えなければならなかったのである。

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第２版。一部修正を施している場合があります。